

Title	ダリマティア語音素論
Author(s)	山末, 一夫
Citation	大阪外国語大学学報. 39 p.297-p.312
Issue Date	1977-03-15
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80676
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ダルマティア語音素論

山 末 一 夫

Dalmatian Phonemics

Kazuo YAMAZUE

In 1897, 1899 and 1901 Matteo Giulio Bartoli, an Italian linguist, investigated the Dalmatian language, which is now extinct and used to be an old one of the Romance languages, in the Adriatic island of Veglia. He recorded the language in a phonetic form listening to the utterances of the last speakers of the Veglian dialect. In this paper I tried to set up the phonemes of the language based on his phonetic data. He distinguishes phonetically, for example, the velar nasal \dot{n} (!) from the dental n . The velar \dot{n} , however, occurs only in the environments $\left\{ \begin{smallmatrix} V \\ u \end{smallmatrix} \right\} - \#$ and $V - \left\{ \begin{smallmatrix} k \\ g \end{smallmatrix} \right\}$, and has the relation of complementary distribution with the dental n 's occurrences. So I regard \dot{n} and n as the allophones of the phoneme $/n/$. He sets, also, a vowel $\widehat{u\dot{o}}$ besides i, e, a, o, u and the six diphthongs. The $\widehat{u\dot{o}}$ which Bartoli perceived to be a kind of diphthongs I regard as an allophone of the phoneme $/u/$, because (1) u and $\widehat{u\dot{o}}$ are used making no distinction even in the same environments, (2) to some extent u and $\widehat{u\dot{o}}$ are complementary in distribution, (3) the environments in which u and $\widehat{u\dot{o}}$ are not complementary in distribution are much confined and (4) the most competent native speaker of Dalmatian pronounced $\widehat{u\dot{o}}$ as a monophthong.

Bartoli, who was one of the antecedent generation of those who developed phonemics, did not realize the validity of phonemic writing, and was thrown into confusion of the excessively minute phonetic writing.

1. ダルマティア語は、古代ローマでダルマティアとよばれた地域（およそ、北西は現在のユーゴスラビアのリエカ〔旧名フィウメ〕、北東はベオグラード、南東はアルバニア北部のシコデル〔旧名スクタリ〕を結ぶ三角形の中の多数の島々を含むアドリア海沿岸地域とその後背地）にかけて話されていたロマンス語である。

1898年6月10日夕刻、最後のダルマティア語の話し手といわれた Antonio Udina 老人が道路修復中の火薬の暴発事故によって77才で死亡したという記事が、数日後トリエステの新聞に掲載された。⁽¹⁾ 彼の話していたダルマティア語はヴェリア方言（ヴェリア島はイタリア語による呼称で、現在はクルク島と改称されている。リエカに近いアドリア海最大の島。）である。19世紀の中頃から、このヴェリア島の言語は一部の学者の注目するところとなり、次第にそれがダルマティア語

とよぶべきロマンス語の一つであることが明らかになった頃には、このラテン語の子孫はイタリア語という別の子孫に駆逐され、数人の話し手を持つにすぎなくなっていた。この言語の採録が急務であると思われていただけに、Antonio Udina の死は、最早とり返しのつかない痛恨事に思われた。ヴェリア島の西方イストリア（現在のイストラ半島）出身のヴェネツィア人の言語学者 Matteo Guilo Bartoli が1897年9月の予備調査の後、ウィーン科学アカデミーの委嘱によって、1899年9～10月と1901年8月、ヴェリア島へダルマティア語の調査と採録に赴いたのはこのような時期であった。⁽²⁾ところが幸いにも、死亡したと伝えられた Antonio Udina 老人は元気で生きており、Bartoli の調査に積極的に協力した。あとで、死亡を伝えられたことについて Udina 老人はダルマティア語で *idi l-a šlungút la vajta maj!* 〈神様がわしの寿命をのばして下さったのじゃ!〉と答えている。Bartoli はこの老人の他にも数人から、程度の差はあれ、ダルマティア語の記憶の糸をたぐり出すことに成功している。ヴェリア方言の資料が消滅寸前にある程度残されたのは、その大部分が Bartoli の努力によるものである。

2. ダルマティア語の資料としては、他にラグーザ方言の断片と思われる語形が記録されている種々の文書がある。ラグーザは、今はドゥブロヴニクとよばれているが、ユーゴスラヴィアのアドリア海沿岸の中でも最も風光明媚な港および保養地として知られている。前4世紀頃からギリシア人の植民市であったエピダウロス（今のツァヴタットで、ラグーザの南東12マイル）の住民がスラヴ系住民の侵出を避けてつくったラグシウムがその起源である。古代ダルマティアの歴史上の最初の住民は印欧語系のイリュリア人であったが、ギリシア人がこの地方に進出してくるようになると、次第にイリュリア人との摩擦が起り、ギリシア人はローマに保護を求めた。前229年に降ローマ人とイリュリア人の長い間の抗争が繰り返されるが、前155年にはダルマティア人（イリュリア人）は都デルミニウムが陥落して、ローマ人の支配を認めなければならなくなった。それ以後、ラテン語をも含めてローマ人の文化がダルマティアへ流入し、三世紀の末にはダルマティア出身の一兵士がローマ皇帝ディオクレティアヌスとなったほどローマ化が進んだ。ローマ帝国各地で俗ラテン語がそれぞれのロマンス語となっていったように、ダルマティアのラテン語も独自の変化の道をたどり、ダルマティア語とよぶべきロマンス語の一つになっていったことはおよそ想像できる。ただこの地方は、その後スラヴ系住民の進出が著しく、ラテン語が命脈を保っていたのは、島々を含めたアドリア海沿岸の地方に限られていた。

15世紀のはじめルッカで生れたトスカナの人 Filippo Diversi（当時のフマニスト流に言うなら Philippus de Diversis de Quartigianis）がヴェネツィア共和国政府の招聘により、学校の長として1434年から1440年までラグーザに滞在し、当時のラグーザの言語について短かい記述を残している箇所がある。

Panem uocant *pen* 〈彼等はパンを *pen* と言っている〉

patrem uocant *teta* 〈彼等は父を *teta* と言っている〉

domus dicitur *chesa* 〈家は *chesa/kesa/* といわれているし、*facere* 《つくる、

facere *fachir* 為す〔不定詞〕は *fachir/fakir* /とされている>

標準的なイタリア語を話す彼は、ラグーザの言語がイタリア語とは音韻の面でも語彙の面でも異なっていたことの片鱗を記している。前述のヴェリア方言で、〈父〉は *tuŋta, tuata, tuta*, 〈パン〉は *puŋ, pũ* と表記されており、*fachir* の *ch/k/* 音は *facája* 〈彼は為す〉にも認められる。しかしながら、残念なことにこれ以外には、ラグーザおよびその周辺の言語を直接に記録した資料は存在しない。他はすべて、間接的にラグーザ方言の語形であると推定される語が、俗ラテン語、イタリア語、セルボ・クロアチア語等の文書の中に散見されるのみである。それらの書簡、遺言状、財産目録、喜劇中の言語混淆による効果を狙った部分、ラグーザ方言拾遺等には、ラテン語の地域の変異形かどうか不明の語形から、はっきりとダルマティア語とわかる語形まで、種々の段階を示す形態が現われる。これらの文書の年代はわかっているものだけで、14世紀を中心として10世紀末から19世紀にまたがっている。それらの語形を年代順にそれぞれの言語の書記体系、音韻体系を考慮した上で、ラグーザ方言の史的音韻論を考察することはある意味では可能であろう。しかしそれは本論の目的とするところではない。ラグーザ方言は音素論の考察の対象となるには年代の幅がありすぎるばかりでなく、ある年代を限定すれば、資料を扱う点で種々の制約を受けなければならない。したがって本論の目的とするところは、*Bartoli* が採録した資料を中心としたヴェリア方言にその対象を限らざるを得ない。

3. ヴェリア方言の資料として残されている文書は、1841年から1901年にわたって数人のインフォーマントから採録されたものが大部分である。他は、地名、人名などの固有名詞とイタリア語およびセルボ・クロアチア文献中のヴェリア方言とみられる語形である。その数人のインフォーマントの中でも前述の *Antonio Udina* ⁽³⁾ (*Udina-Búrbur*) は1842年頃の *Giambattista Cubich* の採録から *Bartoli* による1899年、1901年の採録までの間、実に半世紀以上にわたって七人の採録者（調査者とよぶべき人達ばかりではない）にダルマティア語の資料を提供してきている。彼は、幼時、主として彼の両親よりはむしろ祖母からダルマティア語を学んだ。両親は自分達の間ではダルマティア語を話し、息子の *Antonio* とはイタリア語ヴェネツィア方言で話すという言語上の二重生活をした。これは息子を社会へ送り出す親としては当然の配慮であった。ところがこの *Antonio* の父 *Francesco* は晩年、孫の *Olivo* に対しては自分の母国語であるダルマティア語で語りかけたのである。老年になれば外国語を話すのが困難になることを考慮に入れても、子供を養育する責任から解放されて、亡びゆく母国語を孫に伝えようとする老人の胸中は十分に推察し得る。*Udina-Búrbur* の少・青年期のヴェリア島では、まだダルマティア語を使う言語集団が健在であったらしい。彼はそのような集団のたまり場でモラ（一種のゲーム）をしたり、飲食を楽しんだりすることが多かった。彼のダルマティア語は祖母を中心とした家族と、このような集団の中で修得されたのである。ヴェリア島は当時オーストリアの統治下にあつて、学校や教会等ではドイツ語が使われていたので、彼はドイツ語も話すことができた。また葡萄酒で名高いヴェリア島にはヴェネツィア湾北方のフリウーリ地方の人達が仕事に来ることが多かったので、そ

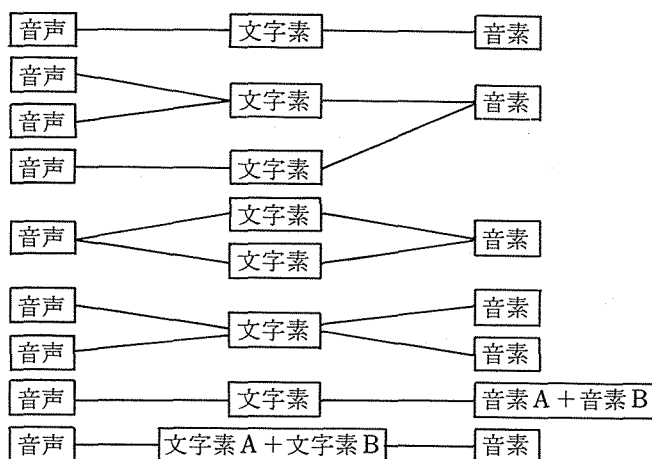
の人達との接触により、彼はレト・ロマンス語フリウーリ方言をも使えるようになっていた。その上、彼の最初の恋人がヴェリア島東岸のスラヴ系住民の集落ヴェルベニコ（ヴリブニク）の女性であったため、彼はセルボ・クロアチア語も学んだ。したがって彼は多重の言語生活をした人であった。純粋な形でダルマティア語を保持してきたわけではなかった。1891年11月末にTeodor T. Buradaが彼からほんの数行分のダルマティア語を採録した時を除けば、彼は Bartoli が調査に来るまで20年近くダルマティア語を話していなかったのである。彼は当時教会の鐘を鳴らしたり、オルガンの送風ふいごを動かしたりする寺男のような勤めをしていたのであるが、Bartoli がダルマティア語を調査に来たことを知ると、早朝の勤めが終るやいなや Bartoli の滞在していた小さな宿屋に駆けつけてきた。そしてダルマティア語で挨拶をし、堰を切ったようにダルマティア語を話し出した。しかし Bartoli は彼をさえぎらなければならなかった。一つには Bartoli がダルマティア語をそのようにすばやく理解できなかったことにもよるが、Udina 老人の話すダルマティア語が、多重の言語生活によって汚染されていることに気づいたからでもあった。とりわけヴェリア方言風の語形をしたイタリア語ヴェネツィア方言は、老人が意識していないだけに用心して扱う必要があった。また彼はダルマティア語の単語が思い出せない時があると、セルボ・クロアチア語、レト・ロマンス語フリウーリ方言、ときにはドイツ語の単語までをそれに当てた。Bartoli はフィレンツェ、ウィーン（その当時 Meyer-Lübke がウィーン大学でロマンス言語学を担当していた）、パリ等でロマンス言語学と比較言語学を修めた少壮の言語学者であった上に、以前にセルボ・クロアチア語を学んだことがあった。Udina-Búrbur の多重の言語層を把握するにはうってつけの調査者であったと言えよう。彼は巧みに Udina 老人のダルマティア語を本来の姿にもどしていった。Udina 老人が単に音声面での機械的な操作だけによってヴェネツィア方言をダルマティア語へ移しかえた——つまり無意識にイタリア語をダルマティア語に偽装させた——と思われる場合は、他の言語を介在させて確かめることもした。このようにして Udina 老人や彼のまわりの少数のダルマティア語継承者達（当然のことながらダルマティア語を話す能力では Udina-Búrbur には及ばない）の熱心な協力と相俟って、Bartoli はそれ以前の誰よりも多量に、かつ正確にダルマティア語を採録したのであった。Bartoli 以前の記録の主なものとしては、1842年頃ヴェリア島の医師 Giambattista Cubich がやはりこの Udina-Búrbur（当時20才前後）をインフォーマントとして採録したもの、1878年と1882年にグラーツ大学のイタリア語教授 Antonio Ive が Udina-Búrbur その他数人から採録したものがある。これらの記録に関してとくに注意を要するのは、各人各様の表記法の違いである。これらの相異は決して看過されてはならないのであるが、各人の表記法が必ずしも首尾一貫してはいないので、本論では用例として圧倒的な大部分を占める Bartoli の表記法との違いがある場合にのみ、その都度記すことにする。

4. Bartoli がグルマティア語の表記に使用した音声字母は次のとおりである。

		唇音	歯音	硬口蓋音(湿音)	軟口蓋音
母音		a (o) o (o) u	—	i (e) e (e)	—
鳴音	鼻音	m	n	ñ	ñ
	流音	—	l r	(l')	—
障害音	摩擦音	有声 v	ś(=f)	j	—
		無声 f	s(β)	—	—
	破擦音	有声 —	ž(dʃ)	g(dz)	—
		無声 —	z(ts)	c(ts)	—
	閉鎖音	有声 b	d	—	g
		無声 p	t	—	k

この音声字母表は Bartoli のそれを調音点の列(縦の列)の入れ替えをただけのものである。ここで使われている音声字母は現在の慣用と異なっているものがあるので注意を要する。ñ = ɲ, ñ = ŋ, l' = ʎ, ś(=f) = z, ž(=dʃ) = dz と置かえれば理解できよう。母音の下印・は通常より狭い母音, _ は通常より広い母音を示すが, 実際のテキストには u の場合以外は出てこない。上の表にはないが, 彼は半母音として j, u を j (または y), w の代りに使っている。

Bartoli の表記は近代言語学の成果を踏まえたものだけに, かなり音声学的であるといえる。n と ɲ と ŋ, l と ʎ, z と dz の区別などは伝統的な表記法にはない新しさを見せている。しかしながら母音は二重母音と u をのぞいては, i, e, a, o, u だけであって, これは音素的な表記に近い。もとよりこの表記がどれほど音声学的であり, どれほど音素論的であるにせよ, 音声と音素を同時に表わし得るものではないことを承知しておかねばならない。徹底した精密音声表記であれば, その上に音素論は確実な基礎を置くことができるであろうが, 当時としては, これができるかぎりの音声学的表記であったのであろう。1930年代の音素論の発展の結果を踏まえることができたなら, Bartoli の表記法はもっと音素論的な立場に近寄っていたかもしれないのである。いずれにせよ, われわれは今となっては Bartoli の表記を音声表記に代るものとして音素論の基礎に置かざるを得なくなっている。Bartoli の表記と実際のグルマティア語の音声との関係は, もはやインフォーマントが存在しない以上, 明確な形で提示できないであろう。しかしそれにもかかわらず, Bartoli の表記は音素論を成立させるに十分な音声学的基盤をもっている。言うまでもなく音声と文字素(グラフィーム。Bartoli の表記では文字=文字素)と音素の関係は単純に一对一の対応をなすものではない。次に示す以外にもその組合せの異なる場合があるであろう。



これらの音声と文字素の関係を、ダルマティア語の場合、音声≡文字素のように見なさなければならぬわけである。だがそれは、伝統的、慣用的に使われている文字（素）とは異なり、音声学の基盤に立った文字素である。したがって、ここにダルマティア語音素論の基礎を置くのもやむを得ないであろう。

5. 母音音素

(A) Bartoli は前述のように i, e, a, o, u と 6 個の二重母音以外に $\widehat{u}\hat{o}$ を設定している。問題になるのはこの音声であって、Cubich も ua または uo で表記している。Bartoli は二重母音の一種と考えているが、次の諸点で、この音声を二重母音と考えるには難点がある。

- (1) インフォーマントの Udina-Búrbur 自身は単一の母音のように発音した。
- (2) Udina-Búrbur のイタリア語の uo の発音とは明らかに別の音声である。
- (3) Bartoli 自身がしばしば u と混同しているか、あるいは \widehat{u} と $\widehat{u}\hat{o}$ の両形を記している(これはインフォーマントの方に原因があるのかもしれない)。
- (4) Bartoli のいう二重母音 ai, au, oi, ua, ia, ie に比べて、二つの要素間の調音点の距たりが小さすぎる(\hat{o} は o よりも u に近い)。

上記(1)~(4)の中でも最大の難点は(3)である。 $\widehat{u}\hat{o}$ については Bartoli 自身も未解決であるといっているが、u と $\widehat{u}\hat{o}$ の殆んど無差別ともいえる生起には困惑していたのであろう。ただ、u がアクセントをとる場合ととらない場合がある(表記してないからといって、必ずしも無アクセントとは限らない)のに対し、 $\widehat{u}\hat{o}$ はごく少数の例外を除けば、必ず $\widehat{u}\hat{o}$ とアクセントをとった形になっていることはことわっておかねばならない。以下に同じ語(格の区別はダルマティア語では、代名詞を除いて消滅してしまっている)でありながら、 \widehat{u} と $\widehat{u}\hat{o}$ の両形をもつ例をあげる。

{ altúr altuôr }	<祭壇>	{ andúr anduôr }	<行く>	{ fuk fuök }	<火>
---------------------	------	---------------------	------	-----------------	-----

$\left\{ \begin{array}{l} \text{fur} \\ \text{fuor} \end{array} \right.$	〈為す〉	$\left\{ \begin{array}{l} \text{grun} \\ \text{gruon} \end{array} \right.$	〈穀物〉	$\left\{ \begin{array}{l} \text{grund} \\ \text{gruond} \end{array} \right.$	〈大きい〉
$\left\{ \begin{array}{l} \text{gul} \\ \text{guol} \end{array} \right.$	〈おんどり〉	$\left\{ \begin{array}{l} \text{kun} \\ \text{kuon} \end{array} \right.$	〈犬〉	$\left\{ \begin{array}{l} \text{levur} \\ \text{levuor} \end{array} \right.$	〈取る〉
$\left\{ \begin{array}{l} \text{ligur} \\ \text{liguor} \end{array} \right.$	〈結ぶ〉	$\left\{ \begin{array}{l} \text{luk} \\ \text{luok} \end{array} \right.$	〈そこに〉	$\left\{ \begin{array}{l} \text{menur} \\ \text{menuor} \end{array} \right.$	〈もたらず、導く〉
$\left\{ \begin{array}{l} \text{mul} \\ \text{muol} \end{array} \right.$	〈悪い〉	$\left\{ \begin{array}{l} \text{mur} \\ \text{muor} \end{array} \right.$	〈海〉	$\left\{ \begin{array}{l} \text{tuta} \\ \text{tuota} \end{array} \right.$	〈父〉

また、一部には— u^{u} —をもつ語が、— ua —または— a —の形で出てくる場合がある。

$\left\{ \begin{array}{l} \text{dat} \\ \text{duot} \end{array} \right.$	〈与えられたる〉	$\left\{ \begin{array}{l} \text{gat} \\ \text{guot} \end{array} \right.$	〈牡猫〉	$\left\{ \begin{array}{l} \text{kualke} \\ \text{kuolke} \end{array} \right.$	〈いくつかの〉
$\left\{ \begin{array}{l} \text{kuar} \\ \text{kuor} \end{array} \right.$	〈車〉	$\left\{ \begin{array}{l} \text{tak} \\ \text{tuoka} \end{array} \right.$	〈すぐそばに〉		

これらの例は— u —形と共に出てくる場合に比べて少ない。採録者が異なれば表記が異なるのは理解できるが、同一の採録者が— u^{u} —を一方では— u —と、他方では— ua —または— a —と入れ替え得る語形の表記に採用している点は、体系性よりも聴覚による観察に重点を置きすぎているようである。

Bartoli は母音の長短を原則として区別していない。彼が Udina-Búrbur に母音の長短についてたずねても要領を得なかった。例外ともいえる少数の場合に長音を示す記号を付しているだけである。

$\bar{\text{a}}$ 〈あゝ〉, $\bar{\text{nā}}$ 〈……じゃないかな?〉, $\bar{\text{o}}$ 〈おゝ〉, $\bar{\text{uv}}$ 〈蜂〉, $\bar{\text{sunt}}$ 〈上人〉。

u^{u} が短母音、長母音のいずれであったかを判断するには以下の諸点が材料となる。

- (1) 採録者の一人 Zonca は gruond 〈大きい〉に green を, fuok 〈火〉に fuuk を, kuor 〈心〉に cuur を記している。
- (2) Bartoli, Cubich とも二つの母音字母で表記している。
- (3) Bartoli 自身の記述によれば、「広めの、長い u に近い音声」である。
- (4) 必ずアクセントがある（イタリア語でもアクセントがあると長母音になることが多い）。
- (5) 数少ない長音符号のついた語 $\bar{\text{sunt}}$ 〈聖なる, ……上人〉の別形として suunt がある。

以上の(1)~(5)により u^{u} は長母音であると考えられる。また(3)と種々の表記によって u^{u} は u の低い（広い）変種である $\bar{\text{u}}$ (=U) の長母音ではなかったかと思われるのである。しかし、母音の長短は、ロマンス語全般においてそうであるように、ここでも音声学的には意味をもつものであっても、音素論的には非関与的特徴となっていると思われる。もしそれが音素論的に有標であるべきものであれば、Bartoli は少数の例ではあるが長音符号をつけているのであるから、それを欠落させてはいなかったであろう。歴史的には、俗ラテン語の母音体系がある時期に音素論的

に長短の区別をなくしてしまった結果がロマンス語全般におよんでいるといえよう。もっとも、Bartoli の少数の例外は別として、すべての採録者が音素論的に意識して母音の長短を区別していないのかどうかは疑わしい。

では $\acute{u}\grave{o}$ と u の関係はどうなっているのでしょうか。両者が相補分布をなすならば、それらを一つの音素の異音とみなすことができるのであるが、両者の分布は前述の混同を別にしても少し重なり合っている。

$\left\{ \begin{array}{l} \acute{a}f\acute{u}r \\ \acute{t}uf\acute{u}\grave{o}r \end{array} \right\}$	$\left\{ \begin{array}{l} \text{〈事柄, 仕事〉} \\ \text{〈悪臭を発する〉} \end{array} \right\}$	$\left\{ \begin{array}{l} \acute{p}at\acute{u}r \\ \acute{m}at\acute{u}\grave{o}r \end{array} \right\}$	$\left\{ \begin{array}{l} \text{〈蒙る〉} \\ \text{〈熟した〉} \end{array} \right\}$	$\left\{ \begin{array}{l} \acute{d}or\acute{u}t \\ \acute{k}amar\acute{u}\grave{o}t \end{array} \right\}$	$\left\{ \begin{array}{l} \text{〈続く〔過去分詞〕〉} \\ \text{〈〔名詞, 意義不詳〕〉} \end{array} \right\}$
$\left\{ \begin{array}{l} \acute{k}ost\acute{u}t \\ \acute{s}t\acute{u}\grave{o}t \end{array} \right\}$	$\left\{ \begin{array}{l} \text{〈近くへ持ってくる〔過去分詞〕〉} \\ \text{〈立つ〔過去分詞〕〉} \end{array} \right\}$	$\left\{ \begin{array}{l} \acute{i}\acute{n}karik\acute{u}r \\ \acute{j}udik\acute{u}\grave{o}r \end{array} \right\}$	$\left\{ \begin{array}{l} \text{〈荷を積む〉} \\ \text{〈判断する〉} \end{array} \right\}$	$\left\{ \begin{array}{l} \acute{v}ed\acute{u}t \\ \acute{l}od\acute{u}\grave{o}t \end{array} \right\}$	$\left\{ \begin{array}{l} \text{〈見る〔過去分詞〕〉} \\ \text{〈ひばり〉} \end{array} \right\}$
$\left\{ \begin{array}{l} \acute{s}t\acute{u}d\acute{i}\acute{u}t \\ \acute{k}omisari\acute{u}\grave{o}t \end{array} \right\}$	$\left\{ \begin{array}{l} \text{〈勉強する〔過去分詞〕〉} \\ \text{〈兵站部〉} \end{array} \right\}$				

しかしこれらの生起する環境は限定されている。すなわち $C-\{ \begin{smallmatrix} t \\ r \end{smallmatrix} \} \#$ である。一方、 $C-(a)\#$ という環境では \acute{u} , $\acute{u}\grave{o}$ のうち必ず \acute{u} が生起し、 $C-C(C)V\#$ という環境では、 $\acute{v}etr\acute{u}ni$ 〈老人達〉などの少数の例外を除けば、必ず $\acute{u}\grave{o}$ の方が生起する。これらの環境は相補的である。

$C-(a)\#$	$C-C(C)V\#$
$\acute{p}al\acute{u}$ 〈沼〉	$\acute{c}\acute{i}\acute{n}k\acute{u}\grave{o}nta$ 〈50〉
$\acute{d}ap\acute{u}$ 〈それから〉	$\acute{l}\acute{u}\grave{o}na$ 〈羊毛〉
$\acute{k}omand\acute{u}a$ 〈彼等は命令していた〉	$\acute{k}\acute{u}\grave{o}rte$ 〈カード〉
$\acute{p}ort\acute{u}a$ 〈彼等は運んでいた〉	$\acute{d}\acute{u}\grave{o}me$ 〈我々は与えていた〉

それ以外の環境、例えば $C-C\#\{ \begin{smallmatrix} t \\ r \end{smallmatrix} \} \#$ も含まれる) では、両方が生起し得る。しかしながら、 \acute{u} と $\acute{u}\grave{o}$ の混同の例は無数に存在しても、 \acute{u} と $\acute{u}\grave{o}$ を入れ替えただけで語の意味が変わるような同一語形のペアは一組しか見出し得ない。 $\acute{m}aj\acute{u}\grave{o}r$ 〈より大きい〉と $\acute{m}aj\acute{u}r$ 〈豚〉であるが、一組だけであるからこれは例外、すなわち同音異義語である両者の別形がたまたま欠除した例であると解せないことはない。

以上を要約してみると、

- (1) \acute{u} と $\acute{u}\grave{o}$ は全く同一の環境に現われ、しかも両者を入れ替えても語の意味を変えることはない。
- (2) \acute{u} と $\acute{u}\grave{o}$ は部分的に相補分布を示す。
- (3) \acute{u} と $\acute{u}\grave{o}$ が相補分布を示さない環境は限定されている。

ということになるであろう。したがって、 \acute{u} と $\acute{u}\grave{o}$ はともに音素 / u / の異音であると考えらるべきである。Bartoli が音素(韻)論の成立以前に採録したために、そのような表記上の混乱が生じたのであろうが、そこに示されたこまかな音声的差異が正確なものであるとすれば、Udina-Búrbur の多重言語生活による言語意識の混乱が表われているとも解釈することができよう。

Bartoli は他に二重母音として au, ai, oi, ua, ia, ie を認めているが、これらはいずれも音素としては / aw, aj, oj, wa, ja (?), je / と解釈できるものである。

(B) しかし母音の音色と開きの度合いに関しては、Bartoli その他が表記に使用している i, e, a, o, u の五母音だけでは説明しきれない点が残る。前述の u と \ddot{u} の場合とはちがって、環境による制限を受けているとは思われないのに、同一の語が二種以上の母音の表記をもつ例が多数存在するのである。([] 内は採録者名、無表記は Bartoli の採録。)

$\left\{ \begin{array}{l} \text{apiér [Cubich]} \\ \text{apiár ["]} \\ \text{apiarte} \end{array} \right.$	$\left\{ \begin{array}{l} \text{〈開く〉} \\ \text{〈開く〉} \\ \text{〈開いた〔形容詞・複数・女性〕〉} \end{array} \right.$	$\left\{ \begin{array}{l} \text{bjal} \\ \text{bjel} \\ \text{bel [Pozzo-Balbi]} \end{array} \right.$	$\left\{ \begin{array}{l} \\ \text{〈美しい, 立派な〉} \\ \end{array} \right.$
$\left\{ \begin{array}{l} \text{comper [Zonca]} \\ \text{compuar [Cubich]} \\ \text{konpar} \end{array} \right.$	$\left\{ \begin{array}{l} \text{〈代父〉} \\ \end{array} \right.$	$\left\{ \begin{array}{l} \text{miniástra} \\ \text{miniéstra} \end{array} \right.$	$\left\{ \begin{array}{l} \text{〈スープ〉} \\ \end{array} \right.$
$\left\{ \begin{array}{l} \text{pret} \\ \text{prat} \\ \text{priat [Zonca]} \end{array} \right.$	$\left\{ \begin{array}{l} \text{〈僧〉} \\ \end{array} \right.$		
$\left\{ \begin{array}{l} \text{sai} \\ \text{sei} \end{array} \right.$	$\left\{ \begin{array}{l} \text{〈(あなたは)……である〉} \\ \end{array} \right.$	$\left\{ \begin{array}{l} \text{spiai} \\ \text{spei} \end{array} \right.$	$\left\{ \begin{array}{l} \text{〈焼き串〉} \\ \end{array} \right.$
$\left\{ \begin{array}{l} \text{ven} \\ \text{vain [Cubich]} \\ \text{Ive} \end{array} \right.$	$\left\{ \begin{array}{l} \text{〈葡萄酒〉} \\ \end{array} \right.$		
$\left\{ \begin{array}{l} \text{vjar} \\ \text{vjer} \end{array} \right.$	$\left\{ \begin{array}{l} \text{〈真の〉} \\ \end{array} \right.$	$\left\{ \begin{array}{l} \text{zar} \\ \text{zer} \end{array} \right.$	$\left\{ \begin{array}{l} \text{〈行く〉} \\ \end{array} \right.$
$\left\{ \begin{array}{l} \text{fiar} \\ \text{fier} \end{array} \right.$	$\left\{ \begin{array}{l} \text{〈鉄〉} \\ \end{array} \right.$		

アクセントの位置の違いはあるが、次のような例もある。

$\left\{ \begin{array}{l} \text{initjánd} \\ \text{intenduóme} \end{array} \right.$	$\left\{ \begin{array}{l} \text{〈私は了解する〉} \\ \text{〈我々は了解していた〉} \end{array} \right.$	$\left\{ \begin{array}{l} \text{siánte} \\ \text{sentér} \end{array} \right.$	$\left\{ \begin{array}{l} \text{〈私は感じる〉} \\ \text{〈感じる〔不定詞〕〉} \end{array} \right.$
$\left\{ \begin{array}{l} \text{les (a)} \\ \text{lasúa} \\ \text{lési} \end{array} \right.$	$\left\{ \begin{array}{l} \text{〈私は去る〉} \\ \text{〈 " 〉} \\ \text{〈放っておけ〉} \end{array} \right.$	$\left\{ \begin{array}{l} \text{offiándro [Cubich]} \\ \text{offendáre ["]} \\ \text{offendúr} \end{array} \right.$	$\left\{ \begin{array}{l} \\ \text{〈攻撃する〉} \\ \end{array} \right.$

これらの例が示唆することは e と a の中間の母音が存在したのではないかということである。もちろん音声学的にそう言えるのであって、音素論的には結論が出ない。e と ε または a と ε が同一環境で対立する例を見出し得ないし、またそれらが相補分布を示すかどうか、e と ε, a と ε を区別していない表記では不明であるからである。ところが ε に対して ɔ が存在したと思われる可能性は少ないと言わねばならない。僅かに nepota と nepa ɔ ta 〈姪〉, náid [Adelmann] と no ɔ id 〈巢〉などにその可能性を瞥見することができるが、o と au, a と o に関する表記上の浮動と混乱は少ない。もし / i, e, a, o, u / の他に、音素 / ε / を認めることができるならば、ダルマティア語は、俗ラテン語が東部ロマンス共通語に変化した頃の六母音の体系をそのまま保守的に残してきたことになる。しかしながら、本論は共時論の視点に立っているので、その限りでは六母音であったかどうかの結論には達することができない。したがってダルマティア語の母音音素としては常識的ではあるが、 / i, e, (ε), a, o, u / を認めることになる。

6. 子音音素

子音音素に関して問題になるのは、Bartoli が $j, \dot{n}, n, l', \dot{s}, \dot{z}$ と表記している音声の取り扱いである。

(A) j が生起する環境は $\# - V, V - V, (V - \#)$ のみである。Bartoli は \dot{i} を母音的な音声として、 i とは区別して扱っているが、 \dot{i} の生起する環境は $C - V, V - \left\{ \begin{smallmatrix} C \\ \# \end{smallmatrix} \right\}$ に限られるので、 \dot{i} と j は相補分布を示し、互いに異音であるとみることができる。

$\# - V$	$j\acute{a}k\dot{u}a$ <水>	$C - V$	$n\dot{i}ena$ <母>
	$jet\dot{u}o\dot{r}$ <投げる>		$p\dot{i}as$ <かけら, 部分>
	$jost$ <正しい>		$studj\dot{u}t$ <勉強する(過去分詞)>
	$jultro$ <他の>	$V - C$	$j\acute{o}in$ <一つの>
$V - V$	$sap\acute{a}ja$ <彼は知っている>		$\dot{z}a\dot{i}me$ <我々は行く>
	$l\acute{o}ja$ <脂>		$fe\dot{i}nta$ <……まで>
	$majest\acute{e}t'$ <陛下>	$V - \#$	$m\acute{a}\dot{i}$ <五月>
$V - \#$	zaj [Ive] <彼は行く>		$d\acute{o}\dot{i}$ <2>
			$bl\acute{a}\dot{i}$ <私は……したい>

上例の $V - \#$ の環境が一見重複するようであるが、Bartoli はこの環境では \dot{i} の方だけを表記に使っている。 zaj も Bartoli の表記では $\dot{z}a\dot{i}$ となっている。相補分布の点だけに関しても、 \dot{i} と j は母音 i とも相補分布を示すから、 i, \dot{i}, j の三つを同一音素 $/i/$ の異音とする考え方もなりたつであろう。しかしながら、Bartoli が摩擦音に分類している j と母音 i を同一音素の異音と認めることは無理があるようである。この摩擦音 j は時には $\check{g}(d\check{z})$ という allograph をもつぐらい摩擦性が強く、到底母音とよべるような音声ではない。したがって \dot{i} と j は $/j/$ の異音とはなり得ても、 i は母音音素と認めるべきである。もちろん、Bartoli の表記よりすれば i と \dot{i} を $/i/$ の異音とし、 j を別の音素の実現とみることも可能である。しかし、そうすれば、音節を考慮する場合、二重母音を別の音素として6個認めなければならなくなる。それよりは、 ai, oi, ia, ie を $/aj, oj, ja, je/$ とし、 \dot{i} と j を $/j/$ の異音とみた方が簡潔な音素論を展開できるであろう。

同様の考え方から、Bartoli が母音としての u , \dot{u} しか認めていないところを、母音音素 $/u/$ の他に、半母音 $/w/$ を認める方がよいと思われる。この場合 $\dot{i}:j = \dot{u}:x$ とすれば、 x に相当する w という文字素は存在しないが、平行的に au, ua を $/aw, wa/$ と解釈して、音素の数を減らすことができる。 \dot{u} の生起する環境は $C - V, V - C$ のみであるから、母音 u とは相補分布を示すことは言うまでもない。

(B) \dot{n} は Bartoli だけが使用している記号で、彼はそれをもって軟口蓋音 $[ɲ]$ を表記している。これが生起する環境は明確に $\left\{ \begin{smallmatrix} V \\ \dot{u} \end{smallmatrix} \right\} - \#$, $V' - \left\{ \begin{smallmatrix} k \\ g \end{smallmatrix} \right\}$ に限定されている。

$\left\{ \begin{smallmatrix} V \\ \dot{u} \end{smallmatrix} \right\} - \#$: $pajau\dot{n}$ <わら蒲団>, $i\dot{n}$ $tal'u\dot{n}$ <イタリア語>, $pu\dot{n}$ <パン>, $ve\dot{n}$ <葡

葡萄酒, bragoń <ズボン>, botuáń <ボタン>

V — {k, g} : lańga <ことば>, inkarikúr <荷を積む>, dunkue <それ故に>, inguánt
<軟膏>

これに対して \dot{n} が生起する環境は $\# - \left\{ \begin{smallmatrix} V \\ i \\ u \end{smallmatrix} \right\}$, $\left\{ \begin{smallmatrix} V \\ i \\ u \end{smallmatrix} \right\} - \left\{ \begin{smallmatrix} V \\ u \end{smallmatrix} \right\}$, $\left\{ \begin{smallmatrix} r \\ i \\ u \end{smallmatrix} \right\} - \#$, $V - C$ [k, g を除く], $C - V$ である (多数のため例は省略). したがって \dot{n} と n は相補分布をなし, 両者は音素 / n / の異音であるとみなすことができる. ここで注目しておきたいのは, $\dot{u} - \#$ では \dot{n} が生起し, $i - \#$ では n が生起するといったこまかい点まで Bartoli が表記し分けていることである. i と \dot{u} の調音点の違いによって, 後続音に [n] と [η] の違いが出ることは音声学的にも十分説明できる.

(C) \dot{n} は Bartoli だけが使用している記号で, 彼はそれでもって硬口蓋音 [η] を表記している. この音声を表記するのに Cubich, Ive, Zonca は gn を使っているが, それらが Bartoli の \dot{n} に必ず対応するとは限らない. この \dot{n} の生起する環境は n および \dot{n} のそれとかなりの部分が重複する. また次の例のように同一環境で対立するペアも存在する.

$\left\{ \begin{smallmatrix} \text{kańúl} \\ \text{kanúl} \end{smallmatrix} \right\}$	$\left\{ \begin{smallmatrix} \text{<ちょうつがい>} \\ \text{<運河>} \end{smallmatrix} \right\}$	$\left\{ \begin{smallmatrix} \text{lúḡṇa} \\ \text{lúḡṇa} \end{smallmatrix} \right\}$	$\left\{ \begin{smallmatrix} \text{<けだるさ>} \\ \text{<羊毛>} \end{smallmatrix} \right\}$
---	---	---	---

したがって, ルーマニア語を除く殆どどのロマンス語におけるように, ダルマティア語に音素 / η / を認めるのも一つの解決法である. しかしながら Bartoli の表記には, 同一語が \dot{n} と n の両方で記されている例が数例ある.

$\left\{ \begin{smallmatrix} \text{artańa} \\ \text{artanjā} \end{smallmatrix} \right\}$	$\left\{ \begin{smallmatrix} \text{fińastra} \\ \text{finjastra} \end{smallmatrix} \right\}$	$\left\{ \begin{smallmatrix} \text{testimuńe} \\ \text{testimunjē} \end{smallmatrix} \right\}$
$\left\{ \begin{smallmatrix} \text{<アオサギ>} \\ \text{<窓>} \end{smallmatrix} \right\}$	$\left\{ \begin{smallmatrix} \text{<証人(達)>} \end{smallmatrix} \right\}$	

それ故, \dot{n} を音素論的に / $n\eta$ / と解釈するとどのような長所と短所が生じてくるのかを検討してみたい.

長所としては次の三点が考えられる.

- (1) 音素の数が一つ減る.
- (2) 他の子音の後には $i\dot{V}$ が続き得るのに, \dot{n} の後には続き得ないことの説明がつく.
- (3) 上記の artańa, artanjā 等の同一音素表記ができる.

また, 短所としては

- (1) $\dot{V} - \#$ の位置にくる \dot{n} を / $n\eta$ / と表記すれば, [η] とは音声学的にずれる印象を与える.
- (2) $n\dot{j}\acute{e}na$ <母>, $min\dot{j}\acute{a}stra$ <スープ> などの語がどうして $n\acute{e}na$, $mińastra$ と表記してないのかが説明できない.

があげられよう. ところで短所の(1)の例は, $konp\acute{a}ń$ <仲間>, $skal\acute{u}ń$ <ねぎの一種>, $biš\acute{u}n$ <仕事> などの語末音を / $-án\eta$ /, / $-ún\eta$ / としなければならない違和感であるが, この程度であれば, 日本語の「シ」を音素表記で / $ʃi$ / でなく / si / とする場合ほどでもないであろう. 短所の(2)については $n\dot{j}\acute{e}na$ の表記以外に Carabaich は $nijena$ と記しているので, あるいは Bartoli

の表記は / njena / ではなく / niena / と解釈すべきものであるかもしれない。Bartori は $\dot{\text{i}}$ を母音的であるといっているが、その使い方に $\dot{\text{i}}$ に近いものと $\dot{\text{j}}$ に近いものがあるので注意を要する。

以上のことを考慮した上で、 $\dot{\text{n}}$ は音素論的にはやはり / nj / と解釈したい。ただ、mañífik <マニフィカート(聖母頌)>、maziñi <岩塊>などの $\dot{\text{n}}$ i は / ni / と判断した方がよいようである。次の例ではすべて $\dot{\text{n}}$ を / nj / と解釈して不都合はない。

añeluṭ <仔羊>、insoruṭ <夢みる〔過去分詞〕>、skañét <小さな腰かけ>、pañuṭka <パンの塊り>、rañatáila <クモの巣>、kuṭña <牝犬>、viña <彼は来る>、piñát <壺>。

(D) l' は Bartoli だけが使用している記号で、彼はそれでもって硬口蓋の湿音 [ɭ] を表記している。この l' の生起する環境は #—V [i を除く]⁽⁹⁾、V—V [i を除く]、V—# であって、これらは l の生起する環境と重複するばかりでなく、次の例のように同一環境で対立するペアもある。

{ pul'a <麦わら>	{ skuṭl <学校>
{ pula <男根>	{ skul' <わきの下>

したがって l' と l を / l / の異音と解釈するわけにはいかない。そこで l' を音素 / ɭ / として別に立てるのも一つの解決法である。しかしながら $\dot{\text{n}}$ の場合のように、同一語が l' と $\dot{\text{l}}$ の両方で記されている例が若干ある。

{ l'at <ベッド>	{ tal'anta <鋭利な>
{ liat [Zonca]	{ taljanta

それ故、 $\dot{\text{n}}$ の場合と同様に考えて l' を音素連続 / lɭ / と解釈する方が適当であると思われる。次の例でもすべて l' を / lɭ / と解釈して不都合はない。

famal'a <家族>、mul'er <女>、fel' <息子>、skul'e <石、かけら>、traval'úr <働く>、nol'a <何一つ……ない>、fal'a <(穀物)の一把>、tal'úr <切る>。

(E) $\dot{\text{z}}$ と $\dot{\text{s}}$ は Bartoli だけが使用している記号で、彼はそれでもって [dz] と [z] を表記している。音声学的には前者が破擦音、後者が摩擦音であるが、前者の破裂が弱まった音声は後者と殆ど聞き分けられないくらい類似している。とくに [dz] が母音間に生起する場合、その破裂が弱まり、[z] に近い音声となるだけに、母音間の [dz] と [z] を聞き分けることは訓練した聴覚をもたなければ困難である。Bartoli がこの点に関してどの程度正確に聞きとり、表記したのかは確かめられないが、多くの母音間の同様の環境で、 $\dot{\text{z}}$ と $\dot{\text{s}}$ が語によってとにかくどちらかにわかれている。はたしてこの両者が対立する音素として共存していたのであろうか。他のロマンス語では一つとしてこの両者を音素として区別している言語はないが、それはこれらを識別するには調音にも聴取にも大きな困難を伴うからである。ダルマティア語においても、音素 / dz / と / z / の両者を認めることに肯んじ難い最大の理由がここにある。一方、母音 ($\dot{\text{i}}$, $\dot{\text{u}}$ を含む) 間と母音に続く語末の環境以外では、 $\dot{\text{z}}$ と $\dot{\text{s}}$ は相補分布をなしている。もし、 $\dot{\text{z}}$ と $\dot{\text{s}}$ が

音素として区別される機能をもつものであれば、この事実は奇妙と言わざるを得ないであろう。これはむしろ、母音間と母音に続く語末で、両者の無差別な使用があったと見做した方が納得がいく。その原因がインフォーマントにあったか、採録者にあったかは明らかにし得ないが、採録者である Bartoli としては、とにかくどちらかで表記しなければならなかったのである。ここでは相補分布の一部にほころびがあるという音素認定の手續上の欠点を、手続きを越えた全体的な状況把握によって補わなければならないと考える。

(a) \dot{z} と \dot{s} が相補分布を示す環境

# — $\left\{ \begin{smallmatrix} V \\ i \\ u \end{smallmatrix} \right\}$	$\dot{z}ar$	〈行く〉
	$\dot{z}u\grave{o}ra$	〈水差し〉
	$zin\dot{z}i\grave{a}v$	〈歯ぐき〉
	$\dot{z}iant$	〈人々〉
	$\dot{z}uant$	〈繫いだ〉
	$inv\dot{o}l\dot{z}ua$	〈彼等は包む〉
$\left\{ \begin{smallmatrix} l \\ r \\ n \end{smallmatrix} \right\} - V$	$ver\dot{z}el\dot{u}\grave{o}t$	〈酔った〉
	$pon\dot{z}u\grave{o}r$	〈刺す〉
	$\dot{z}in\dot{z}i\grave{a}v$	〈歯ぐき〉
	$vi\grave{a}r\dot{z}$	〈キャベツの一種 の茎〉

# — C ^{vd(7)}	$\dot{s}br\dot{i}ndul$	〈ぼろ〉
	$\dot{s}lanz$	〈一走り〉
	$\dot{s}mor\dot{f}i\grave{a}z$	〈しかめ面〉
V — C ^{vd} または	$\dot{s}vej\dot{u}r$	〈目を覚まさせる〉
	$de\dot{s}mun$	〈朝, 明朝〉
	$di\dot{s}mun$	〈 " 〉
	$lu\dot{s}mar\dot{i}n$	〈マンネンロウ〉
	$di\dot{s}n\dot{u}r$	〈食事をする〉
	$i\dot{n} ko\dot{s}d\dot{a}i$	〈今日〉

— V において例外として \dot{s} が生起するものに $\dot{s}iv$ 〈生きた〉, $\dot{s}i\dot{s}ind\dot{e}l$ 〈教会の灯明〉がある。なを、母音間ではあるが $\left\{ \begin{smallmatrix} i \\ i \end{smallmatrix} \right\} - a$ の環境と a の後の語末では必ず \dot{s} の方が生起することは留意しておくべきであろう。

$\left\{ \begin{smallmatrix} i \\ i \end{smallmatrix} \right\} - a$	$ko\dot{i}\dot{s}a$	〈……のごとく〉	a — #	$pa\dot{s}$	〈平和〉
	$sp\dot{a}\dot{i}\dot{s}a$	〈出費〉		$sku\dot{a}\dot{s}$	〈殆んど〉
	$bi\dot{s}at$	〈うなぎ〉		$int\dot{j}i\dot{a}\dot{s}$	〈了解された〉

(β) \dot{z} と \dot{s} が共に生起する環境 (アクセントは対象外)

$\left\{ \begin{smallmatrix} i \\ e \\ u \end{smallmatrix} \right\} - \#$	$barkar\dot{i}\dot{z}$	〈棧橋〉	$ri\dot{s}$	〈笑い〉
	$bat\dot{e}\dot{z}$	〈洗礼〉	$zar\dot{e}\dot{s}$	〈桜〉
	$stru\dot{z}$	〈ダチ ョウ〉	$bu\dot{s}$	〈穴, 洞穴〉
u — i	$a\dot{n}k\dot{u}\dot{z}in$	〈鉄床〉	$bru\dot{s}ig\dot{i}n$	〈妬み〉
u — a	$distru\dot{z}i\dot{a}ja$	〈彼はつぶす〉	$su\dot{s}i\dot{a}in$	〈プラム〔複数〕〉
o — \dot{i}	$po\dot{z}i\dot{a}ul$	〈(椅子の) ひじ掛け〉	$bo\dot{s}i\dot{u}rd$	〈嘘つき〉
i — u	$mi\dot{z}ul$	〈ガラス〉 (mi\dot{s}ul もあり)	$bi\dot{s}u\dot{n}$	〈仕事〉
i — \dot{i}	$\dot{z}i\dot{z}i\dot{u}l$	〈指ぬき〉	$provi\dot{s}i\dot{a}un$	〈[It.] provvigione〉
a — $\dot{u}\grave{o}$	$sta\dot{z}u\dot{o}ta$	〈小さな通り〉	$sua\dot{s}u\dot{o}ta$	〈額縁(?)〉

上記の母音間以外の環境では殆ど \dot{s} が生起する。(β) のような分布を示す \dot{z} と \dot{s} を敢て一つの音素の異音とする解釈には反論もなりたちうるであろう。しかしながら Bartoli の表記がイタリア語の綴字にも影響されていることを考慮してみると、(β) の分布がどれほどの正確さをもっているかという点について、疑念の余地がないわけではない。

\dot{z} と \dot{s} を同一音素の異音とすれば、その音素を / dz / または / z / のどちらで表記すべきかという点については、その性質上どちらでも不都合はないが、便宜上 # - V の環境で生起する / dz / をあてる方がよいであろう。

(F) Bartoli はとくに語末での音節の主音となるべき r を r_t で表記している。

alégr _t <陽気な>	k _u atr _t <4>	lit _r <リットル>
majéstr _t <先生>	mistr _t <親方>	n _u éstr _t <我々の>
pulj _i atr _t <仔馬>	teátr _t <劇場>	telég _r f <電報>
síd _r <聖シードロ>	zj _i án _r <灰>	

これらの例は Bartoli 自身が不確実な語形と記している telég_rf を除けば、 $\left\{ \begin{smallmatrix} t \\ d \\ n \\ g \end{smallmatrix} \right\}$ - # という環境に限定されるので、 r と r_t は相補分布をなす。したがって / R / という音素を別に立てる必要はなく、 r と r_t は / r / の異音とみてさしつかえない。

(G) Bartoli がその他の子音の表記に使用している p, t, k, b, d, g, m, n, f, v, s, z, č, ĝ, l, r については、音声と文字素の間の関係に若干の問題は残されているが、それぞれ音素 / p, t, k, b, d, g, m, n, f, v, s, ts, tʃ, dʒ, l, r / とすれば解決できると思われる。

以上の結果をまとめると、グルマティア語の子音音素としては次の19個を認めることになる。

	唇(歯)音	歯(茎)音	硬口蓋音	軟口蓋音
閉鎖音	無声音 p	t		k
	有声音 b	d		g
破擦音	無声音	ts	tʃ	
	有声音	dz	dʒ	
摩擦音	無声音 f	s		
	有声音 v			
鼻音	m	n		
半母音	w		j	
側面音		l		
ふるえ音		r		

7. アクセントを標記している採録者は Bartoli, Petris, Ive であるが、このうち Bartoli の標記がやはり一番信頼できるので、それに準拠することにする。Bartoli は ' と ` の二種のアクセント記号を使っているが、` は彼がとくに気づいた場合の文のアクセント (Satzakzent) であって、Krèatói_re のよう

な例外を除けば、その位置は´の来る位置と同一であるので、実質的には一種類のアクセントを標記しているにすぎないわけである。ダルマティア語のアクセントは当該音節の母音を他の音節の母音よりも高く発音するピッチ・アクセントである。そしてその位置は語の最後の音節または最後から二番目の音節にあるのが普通である。最後から三番目の音節にアクセントのある語は例外的に存在するが、これらは外国の人名や地名、enclitic としての代名詞が動詞の語尾に付加した場合、また外国語の借用形などに限られる。

ádelmaň <〔人名〕>, márasič <〔人名〕>, rémini <〔Rimini 〔地名〕>, lésilo <彼を……させる>, miáterli <彼等を置く>, salvútika <野生の,〔It. selvática〕>, jérimo <我々は……であった〔It.Venet. járimu〕>.

Bartoli は最後の音節にアクセントを持つ語は原則としてすべてアクセント記号をつけている。だから、それ以外の二音節以上の語は、アクセント記号がついていなくても、最後から二番目の音節にアクセントがあるとみて、大方は間違いない。そのようなアクセントの体系になったのは、概略的な説明になるが、俗ラテン語ではアクセントの位置が音節構造によって自ずから決っていたの⁽⁸⁾に対し、ダルマティア語では音節構造が歴史的に大きな変化を蒙ったのに、アクセントの位置の方は保守的に残されたためであると考えられる。

	俗ラテン語	ダルマティア語
不定詞	cantāre	kantúr <歌う>
直説法・現在・一人称・複数	cantāmus	kantuōme
直説法・未来了過去・一人称・単数	cantābam	kantúa
接続法・過去完了・一人称・単数	cantāssem	kantés
完了分詞	cantātus	kantút
不定詞	placēre	plakár <気に入る>
直説法・現在・三人称・単数	plācet	plúk

しかし音節構造からアクセントの位置が決められないとしても、アクセントの、二つの音節のうちのどちらかの位置は語それぞれに個有のものであり、アクセントを標記しなくても、その位置はすでに決まっていることになる。もしここで、アクセントの位置の違いだけを別にすれば全く同一の語形で、語の意味なり文法的機能なりが異なるペアの語形が存在するなら、アクセントは音素としての役割りをもつことになる。しかし、ダルマティア語ではそのようなペアは存在しない。したがって、ダルマティア語のアクセントは、俗ラテン語の自動的にその位置が決まるアクセントと同様に、音素としての役割りを担っていないといえる。この点でも俗ラテン語の特徴を保守的に受けついでいるのである。

(註)

- (1) この記事のせいなのか、(2)の Bartoli の著書の誤解を招きやすい個所（個所の記事の引用のあとに *Das ist das Vegliotische, und das war sein Ende.* とある）のせいなのか、H. Pedersen: *Sprogvidenskaben i det Nittende Aarhundrede*, 1924 の英訳本 *The Discovery of Language, Linguistic Science in the 19th Century*, 1972, Indiana Univ. Press, P.93 および W.D. Elcock: *The Romance Languages*, new and rev. ed., 1975, Faber & Faber, P.67 にはこの老人が1898年に死亡したことになっている。
- (2) Bartoli はこの調査の結果を *Das Dalmatische, altromanische Sprachreste von Veglia bis Ragusa und ihre Stellung in der Apennino-balkanischen Romania*, 2 Bde., Wien, 1906. にまとめている。本論の資料はすべてこの労作に負っている。
- (3) ヴェリア島出身で同名の Antonio Udina がもう一人イストラ半島の Pola (Pula) に居て、彼もダルマティア語を思い出すことができた。この二人を区別するために、Bartoli は Udina-Búrbur と Udina-Pola というよび方をしている。彼等に互いに又いとこであつたらしい。
- (4) W.D. Elcock: *ibid.* p. 55 以下。
- (5) J.M.-Anderson and J.A. Creore (eds.): *Readings in Romance Linguistics*, 1972, Mouton, p.283 および Elcock; *ibid.* P.57.
- (6) 例外として *fel'i* 〈息子達〉がある。
- (7) *C^{vd}* は有声の子音。
- (8) Elcock: *ibid.* P.51.